

たより

『美紗の会』 ニュース

第十二号

平成四年六月三日

発行者
『美紗の会』事務局

☎ 03-3441-2726

主 会

六・七月の活動

舞台を中心に

「ゆかたざらい」は

七月二十三日

会主の六月以降の活動予定がほぼ決まった。今年も稽古の間を縫って多くの舞台活動が予定されている。会員諸兄弟の絶大な応援が望まれる。

閑取には白星、演奏家には観客の拍手が最大の贈り物。スケジュールの詳細は次の通り。

六月五日(日)・伊香保
「さつき亭」で、恒例の懐石と伝統芸能の集い。今回は会主との共演も回を重ね、すっかりお馴染みになった宮崎青歌師の尺八も聴ける。

七月三日(日)・国立小劇場において「坂東雪芝の会」で「ゆき」の地方を演奏。

七月六日(水)・これも恒例の閑崎ひで女「華の会」で地方演奏。演目は「菜の葉」「こすの戸」「緑の綱」「ぐち」「ゆき」。「菜の葉」で

は以前本紙でもご紹介した「美紗の会」の会員で閑崎ひで女師に入門、地唄舞を稽古している増田真知子さんが初舞台を踏む。また「こすの戸」では布唄師の学友で、お馴染みの田野純子さんこと閑崎純女さんが舞われるので盛大な声援が望まれる。

七月十六日(土)・逗子市市民会館ホール「山村千代恵の会」での地方演奏。演目は「貴船」「鉄輪」「こすの戸」「茶音頭」「扇づくし」の地方演奏。

七月二十三日(土)・芝白金福社会館において「美紗の会」ゆかたざらい。当日は会主の誕生日。会員自慢の喉糸、踊り。今年は何が出るか。演奏の後の宴会、隠し芸も楽しみ、皆で会主の誕生日をお祝いしよう。

会員の情報

皆夫々の方面で頑張っています。お稽古以外のこともでも消息お知らせ下さい。

* 田中 正太さん

「二親が長唄をやっていたっしつやたこと」から、入門時から、長唄の三味線の稽古に励んでおられました。もともと本格的な勉強をしたと、小学校の同級生で現在綱島で長唄の三味線の師匠をしている片屋三之助師に四月から入門なさいました。「美紗の会」の方は稽古は中断されますが、引き続き会員として残り、おさらい会には参加して下さいです。

田中さんをお願いしていた「美紗の会」副会長には岡崎慎一さんが就任されます。

* 篠崎龍也君

幼稚園の頃から稽古をしてきた龍也君ですが、もう中学三年生。来年は高校入学のため受験勉強に全力投球することになりました。それで日曜

ことに通っていた稽古は中断することになりました。稽古で見せた粘りとフアイトを受験準備で発揮するでしょう。入試成功を祈りましょう。

* 三階久夫さん

横浜から一時間以上も車をとばして師匠のところに通っていました。稽古は暫く中断することになりました。

ただ「ゆかたざらい」では、またご自慢の喉を聞かせて下さることと思います。

* 鈴木綾子さん

日暮里で美容院を営んでいる鈴木さん。ずっと多忙で稽古を中断していましたが、四月からまた再開。三味線と小唄の稽古に励んでいます。

「ゆかたざらい」で皆様に目には掛かれるのを楽しみにされています。

* 高花博さん

帝国産業の社長としてご多忙の毎日ですが、布唄師匠の美声に魅せられ、カラオケはほどほどに、しっとりした邦楽に方向転換しようとの一大決心をされました。

* 宍倉育三さん

日本芸能の中でも歌舞伎の熱烈な愛好者で、その評論は玄人はだし。以前、小唄、端唄の稽古に通っておられましたが、念願の「勸進帳」を見非習得したいと、再び長唄の稽古を始めました。皆様に成果をご披露出来るのは来年でしょうか。

『錦会』観賞記

飛田さんの踊り

本郷公基

去る四月二十九日……ゴールデンウィークの初日、国立劇場大劇場で花柳寿楽一門の発表会『錦会』が開催され、花柳千寿文こと「美紗の会」の飛田さんが出演された。

第一部は午前十一時、第二部は午後四時の開演で大劇場は熱心な観客で満員の盛況であった。

長唄を中心とした第一部には「娘道成寺」や「吉野山」など我々にも少しは馴染みある演し物が十二もあり、第二部は清元や常磐津を主にして

十の演目で構成されていた。われらが飛田さんは驚いたことに、第二部の終り、即ち会主の踊りの一つ前の演目で常磐津「新口村道行」の一人である忠兵衛役を演じ、お得意の男舞を披露された。

幕が開くと花道から梅川と忠兵衛が二人手を携えて出てくる。飛田さんの踊りは国立劇場の大舞台に映える見事な男舞であり、遊女梅川に迷い、

公金の封印を切って融通し、二人で逃避しようとする切羽詰った男女の姿がよく表現されており、客席のあちこちから「千寿文」「チツフミ」の声がかかる。

いつも「おひきぞめ」や「ゆかたざらい」で踊られている飛田さんを見て「エライ上手な人やなあ」と思っていたが、今日の大舞台を観るまでは気さくにお付き合いして下さっていたのがこんなエライ人とは露知らず、文字通り恐れ入った次第であった。

今年のゴールデンウィークは最初から素晴らしい芸を観せてもらって心豊かな気分になって浸っている。

随 筆

伽羅のかおりと

セイシエル島

橋本直樹

伽羅の香りと

あのまきまは

幾夜泊めても

わしや泊めあかぬ

寝てもさめても

忘れぬ

小唄の名曲『伽羅のかおり』の文句である。

香というのは、もと伽羅、沈香、黄熟香、羅斛香といった古木をけずりとして炭火にくべて、その香りをかいだり仏事に使ったり、あるいはテートの前に衣類に焚きしめるものであった。文明の進まぬ昔ほど人の生存本能たる五感

は、その本来の機能が鋭敏であったから、匂いについても現今の我々よりもよほど敏感であったにちがいない。食べもの、においを嗅いで危険を察知するというのも当然日常のことであつたらうが、恋する男がたずねて来た時、暗闇の中でまず近づいて来たのは香りであつたらう。想像をたくましくすれば、男が女を思い出すとき、あるいは女が男の訪いは今宵かとひそかに待つとき、かの君ならではの香りを思い出し、あ、あの匂いよと、体を熱くうるお

わたしたちであらうと思う。

香りの良さやちがいはほと言葉で書きにくいものはないので、艶っぽい想像はこの辺りにして香の木の話をすすめることとする。

香木とされる木は南洋のく限られたところからもたらされたもので、極めて貴重なものであつた。我国にはほとんどが中国経由で入つて来たものらしく、その原産地についても中国の文献に記述されている地名を解説して、どこかをつきとめる方法がとられて来たようである。

☆ ☆ ☆ 内藤湖南と云えば和漢の古文書万般に通じたばかりでなく、江戸時代の大阪の町人学者富永伸基や山片蟠桃の独創的業績を発掘したり、「現代の日本のよつて来たところを知ろうと思えば室町時代以降を知ればよろしく、それより昔は関係ありませぬ」と云い切つて目からうろこを落させてくれたえらい人である。同じように湖南が中国史について、「宋からこつちを勉強すれば現代の支那はわかります」と云つたことが何十年も

たつた最近になつて中国の学会で脚光をあびていると云うことが新聞にのつていたので思い出す。

因みに思い出したが、昨年の夏、「美紗の会」の赤坂グループの九州旅行で偶然旧宅を參觀した三浦梅園という哲学者も、内藤湖南が仲基、蟠桃と並べて、「徳川時代の儒者の多くが人の焼直しを書いた中で、どこまでも自分の見識で、自分の考で書いたものであつて、少しも人の考を頼らずに書いたえらいものだ」と云つている人である。

☆ ☆ ☆ その内藤湖南に「香の木所について」という一文がある。その中で香木の産地として文献にある羅国、滿刺加、蘇門答刺を、夫々ロブリ、マラツカ、スマトラに比定することの当否を検討しており、一種の謎解きで面白い。

☆ ☆ ☆ として一ヶ所「差咀羅」… サソラと読むらしい… というところが現代の呼称でどこに当るのか確定しがたいとした上で、この難問には「解答を与えた素人からの手紙を紹介している。

我々にとって面白いのは、その素人というのが大阪商船のシンガポール在勤員で高橋健一郎という人だということである。

『小生（高橋健一郎）の考えにては、サソラはセシエル群島より転訛したものと存じ候。然らばサソラは果してセシエルより転訛したものと断言し得るや、その点新村博士等の御研究に譲るも、小生職業上の知識より按ずるに…』としてインド洋一帯での交易、航海の歴史を説き、『印度東阿通商の中継港として東阿より香料香味をこのセシエル島を経由または積替地として印度さらに支那方面に輸出し遂に我国に…』と推定している。

湖南は、多分この書簡で多年の懸案に解答を得たと思つたようである、自分の論文の末尾に書簡の全文を載せて紹介している。

ところで、高橋健一郎なる人であるが、大阪商船八十年史などをくつてみても名前が出て来ない。今回あらためて調べたわけではないが、役員船長、機関長、シンガポール首席在勤員のいずれにも名前がなかったように思う。湖南によれば、「同君が余の航欧旅行に際しシンガポールの在りて、余のために沈香の購求に助力せられたる関係」

と云つており、彼の欧州旅行は大正十二三年であるから、当時の大阪商船のシンガポール主席須賀川太郎氏の下で働き、寄港船の船客のお世話に奔走した若き社員、それが高橋健一郎氏であろう。当時かりに二十五才とすると、今はもう九十六才でいられることになるのだが。

☆ ☆ ☆ さて、セシエルは今でいうセイシエル島。インド洋に浮かぶリゾートの島として最近著名になりツアー客を呼んでいる。

香木渡来、小唄名曲のはるか淵源をたずねて、「美紗の会」でセイシエル旅行など想像するだけでも楽しい。海辺のバンガロー、そこで胡美紗師匠の至芸「伽羅のかおり」を聞かせていたゞき、名香の魅惑をしのぶのも一興ではあるまいか。（おわり）

『編集雑記』 関西にいる橋本さんから原稿を貰つた * 電話で依頼したその二日後にはもうファックスで送ってくれる特急便 * 速さにかかわらず、それは濃く、重みのあるもの * 内容から察するに、相当前から温め、熟成していたものらしい * 小唄から雅の世界に思い

最近思うこと

会主 橋場はつえ

昔から「便りないのは無事の知らせ」とか「言わぬは言ふにいやまざる」とか言われていますが、はたしてそうでしょうか？

私共が日頃精進している邦楽はまさしく行間の音楽で、唄と糸との微妙なズレや音と音との間に感情を表現出来なくてはいけません。その作品にはなりませんが、そこまでゆくのには至難の業です。そこで日々の精進ということになります。まず大切なのは、声や音をいかに出すかということ。『美紗の会』の「たより」もこうして十一号まで発行するに至つたのは、編集者のなみなみならぬ苦勞あつたこと、便りあつたの「たより」を思う今日この頃です。

を馳せ、その源の探求の先に知られざる自分達の先輩がいたとは、なんと口マン溢れる話ではないか * ソルト先生の言葉にもあつたように布師は我々を無限の幻想の世界に導く案内人 * 優れた案内人と、それを遊び、楽しむ仲間にも恵まれ * 「美紗の会」の会員は幸せだ * いやいよ夏到来、会員諸兄姉も忙しくなるだろうが寝冷えには気をつけて（た）